

聖書：Iヨハネ4：9～10

説教題：ここに愛がある

日時：2017年12月24日（朝拝）

ここに遣わされたクリスマスの出来事が特に神の愛と結びつけて語られています。皆さんはどんな時に神の愛を感じるでしょうか。ある人は自分には最近良いことが続けて起こっているので神は私を愛してくださっていると感じるというかもしれません。テストに合格するようにお祈りして取り組んだら見事そう導かれた。あるいは体の調子が悪いので心を込めてお祈りしたら、思った以上に早くに回復できた、等々。またある人は天を見上げ、流れ行く空の雲を仰いで神の愛を感じるかもしれません。ある人は生命の不思議、人体の神秘を知るにつけ、そこに神の愛を覚えるかもしれません。神は色々な方法でご自身の愛を示しています。この世界はこれを造られた神ご自身をあかししていますから、私たちはそれらの神の作品を見ることを通して神の愛を覚えることができるかもしれません。また神はこの世界を造られただけでなく、御心に従って今も導いておられる方ですから、日々の摂理の出来事のうちに神の愛を覚えることもできるでしょう。マタイの福音書5章45節には「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださる」とありますから、久しぶりの日の光を感じたり、あるいは雨が降るといった出来事の中にも神の愛を見ることは可能だと思えます。しかし今日の箇所は「神がそのひとり子を世に遣わした出来事においてこそ、神の愛が私たちに示された」と言っています。「ここに愛があるのです」と言っています。ですから私たちは神の愛を知りたいなら、「ここにそれがある」と言われている事柄にこそ、思いを向けなければならないということになります。

さて、その神の愛を知るためにまず大事なことは私たち自身がどういう者であるかを知ることです。果たして私たちは神から見て愛らしい者たちなのでしょうか。思わず愛を注ぎたくなるような者たちなのでしょうか。神の心をくすぐるような、あるいは引きつけるような魅力的な存在なのでしょうか。9節に「神がそのひとり子を世に遣わしたのは、その方によって私たちにいのちを得させるため」と言われています。ここから分かることは、この方が来てくださることなしには、私たちは死んでいた者であるということです。確かに私たちの肉体は生きています。肺も呼吸していますし、心臓も動いています。しかし霊的な意味では死んだ状態にある。本来、人間は豊かないのちを持つ者として造られました。造り主なる神と正しい関係にあつて神から流れて来る満ち満ちた

いのちに生かされて生きる者たちでした。しかし罪を犯したことによって神との関係に断絶が生じてしまいました。それ以来、人間は生ける屍の状態にあると聖書は語っています。エペソ書 2 章 1 節：「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって・・・」。

そして霊的に死んだ状態にある人間は、死んで横たわって何もしない人なのではありません。この霊的に死んだ状態にある人間は、神を受け入れず、神に敵対し、神に反抗します。神を認めないという態度を取り、神を拒絶し、自分が神になろうとします。そのことはこのクリスマスの出来事にもはっきり示されています。「神はそのひとり子を世に遣わした」とありますが、この世はイエス様をどのように迎えたでしょうか。この世はイエス様を受け入れませんでした。その結果、イエス様は誕生した夜、宿屋にいる場所はなく、家畜小屋の飼料おけの中に寝かされました。またイエス様は誕生後、ヘロデにいのちを狙われ、エジプトへの逃亡生活を強いられました。その後ナザレの田舎で約 30 年生活され、公の宣教活動を始められた後も拒絶と反抗と迫害の連続でした。これらのことを考えて分かることは、神が私たちを愛してくださったのは私たちに何か素晴らしい点があったからではないということです。普通、私たちの愛は相手の側に何か賞賛すべき点があるから愛するというものだと思います。ですから相手の中に愛することができるものが見出せなくなると、私たちはその人を愛し続けることができなくなる。私があなただを愛せないのは、あなたが悪からということになる。このように私たちの愛は相手のあり様に依存しています。しかしそういう目で見れば、私たちに神の前に優れた点の一つもありませんでした。霊的な死人であったばかりか、神を拒絶し、神に逆らう者たちでした。私たちは自分たちがそういう者たちであることをまず良くわきまなければ、神の愛の偉大さを知ることはできません。自分が神の前でどういう者であるかをわきまえる時に、神の愛がどのように偉大なものであるかを初めて知り始めることになるのです。

ではそのような私たちに、神はどのようにご自身の愛を示されたでしょうか。9 節に「神はそのひとり子を遣わした」とあります。ここにイエス・キリストが神にとってどのような方であるかが語られています。それは神にとってのただ一人の御子ということです。ここにこの方の特別さが示されています。人間の場合でも、ある親にとっての一人子という存在があります。そのひとり子に対する親の愛には特別なものがあると思います。もちろん二人、三人と子どもが与えられたら、その愛が薄まるというわけではあ

りませんが。しかし神とそのひとり子イエス様の関係は人間の親とその一人子の関係とは比較になりません。人間の場合、一人子は親が生まれてから20年も30年も経ってから一緒に生活するようになった間柄に過ぎず、その後もせいぜい数十年共に歩むという関係でしかないでしょう。またその親にとってこれから先、他の子どもを持つ可能性が全くないというわけでもありません。それに対し御子キリストは永遠の昔から父なる神のただ一人の御子です。他には決して持つことがあり得ない一人子です。この御子はヨハネの福音書の冒頭で「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」と言われている通り、神と同等で、一つの交わりにある方です。また「父のふところにおられるひとり子の神」と表現されていますように、父の胸の中で最大最高の愛を注がれている方です。一体誰がこの父なる神の一人子に対する無限の愛を推し量ることができるのでしょうか。

そのかけがえのない一人子を、神はご自身に背を向け、反抗する世に遣わして下さったというのです。何のためでしょうか。それは死んでいた私たちにいのちを得させてくださるためです。そのために神がしてくださったことが10節にある通り、御子を「なだめの供え物」として遣わして下さったということです。このことを今日は良く思い巡らしたいと思います。ここに「なだめ」という言葉が出て来ますが、一体何をなだめるのでしょうか。それは神の怒りを！ということです。罪人に対する神の怒りということです。ここに神は私たちの罪に対して怒っておられるという真理が示されています。私たちがいのちに生きるようになるためには、まずこの神の怒りが静められなければなりません。私たちはここで間違ったイメージを持たないように注意しなくてはならないと思います。神の怒りがなだめられなければならないという時、まるで神が自制できない怒りに囚われているかのように考えてはなりません。たとえば放蕩息子のたとえにおいて、兄息子は弟が帰って来て迎え入れられたというニュースを聞いて腹を立て、家に入ろうとしなかったという場面が出て来ます。そこで父が家から出て来て、色々なだめてみたと言われています。あの兄息子のように、神は感情をコントロールできずに怒っている方、誰かになだめてもらわなければならないという時、まるで神が自制できない怒りに囚われているかのように考えてはなりません。たとえば放蕩息子のたとえにおいて、兄息子は弟が帰って来て迎え入れられたというニュースを聞いて腹を立て、家に入ろうとしなかったという場面が出て来ます。そこで父が家から出て来て、色々なだめてみたと言われています。あの兄息子のように、神は感情をコントロールできずに怒っている方、誰かになだめてもらわなければならないという時、まるで神が自制できない怒りに囚われているかのように考えてはなりません。たとえば放蕩息子のたとえにおいて、兄息子は弟が帰って来て迎え入れられたというニュースを聞いて腹を立て、家に入ろうとしなかったという場面が出て来ます。そこで父が家から出て来て、色々なだめてみたと言われています。あの兄息子のように、神は感情をコントロールできずに怒っている方、誰かになだめてもらわなければならないという時、まるで神が自制できない怒りに囚われているかのように考えてはなりません。たとえば放蕩息子のたとえにおいて、兄息子は弟が帰って来て迎え入れられたというニュースを聞いて腹を立て、家に入ろうとしなかったという場面が出て来ます。そこで父が家から出て来て、色々なだめてみたと言われています。あの兄息子のように、神は感情をコントロールできずに怒っている方、誰かになだめてもらわなければならないという時、まるで神が自制できない怒りに囚われているかのように考えてはなりません。

きないのです。罪人に対して神は義なる怒りを持っているのです。

ある人はこれを聞いて、「神は私たちに対してどういう方であられるのか。私たちに怒っておられるのか、それとも私たちを愛してくださっているのか。神の怒りと愛は矛盾することのように思えて、うまくイメージができない」と混乱されるかもしれません。そこである人々は、神の怒りについてのメッセージは薄めて、そういう箇所は読み飛ばし、神の愛が語られている御言葉にだけ注目します。しかし結論から言えば、これでは神の愛を本当に知ることはできません。それでは安っぽい人間的な愛にしかありません。私たちはそうではなく、神が罪に対して怒っているという聖書のメッセージを十分に聞くべきです。義なる神は罪人とその罪に対して怒りと不快感を覚えている。ところが聖書が示す驚くべきメッセージは、その怒りたもう神が私たちを受け入れるため、ご自身の大切な一人子を世に遣わしてくださったということです。私たちに怒っておられる方が、その怒りがなだめられるために、すなわちご自身の義が満足させられるために、一人子の御子をなだめの供え物として遣わしてくださった。

しばしば旧約聖書に示されている神は聖なる神で怖い方だが、新約聖書に示されている神は愛の神で優しい方だと言われます。旧約と新約とでは神のイメージが違う。そして私は新約聖書のイメージの方が好きだ、と。しかしもちろん旧約と新約に出て来る神は別々の神ではありません。確かに旧約聖書には、慈愛に満ちた神のお姿がたくさん出て来ますが、より神の聖さ、罪に対する怒り、罪人にとっての近づきにくさといった面が前面に出ていると言うのはその通りかもしれません。しかし私たちは新約聖書の神を、これと矛盾する方のように考えてはならないのです。新約聖書に示されている神は、旧約聖書に示されて来た通りの聖なる神です。罪に対して怒っている絶対的に聖い神です。その方が私たちのような者を愛して約束の御子を送ってくださったのです。そういう意味で新約聖書を読んだだけでは神の愛を十分に知ることはできないと言わなければなりません。旧約聖書に示されて来た神のお姿を十分に見てこそ、言うならば神の聖さや怒りを背景にしてこそ、私たちは新約聖書のメッセージを驚きと恐れをもって真に理解し始めることができるのです。

今日の御言葉では次のことを押さえることが大事と思います。私たちはイエス様が私たちの救い主として来て下さったことを知っています。イエス様は私たちの罪の身代わりとして十字架にかかってくださいました。このイエス様を通して、私たちは神に近づ

き、神に受け入れて頂くことができます。しかしそのあまり、イエス様が私たちの近くに来てくださった愛の方で、父なる神は遠くで怒っている怖い方と考えるべきはありません。イエス様が私たちの罪のためのなだめとなり、私たちのために祈ってくださったので、父なる神は渋々私たちを愛する方に変わられたではありません。今日の箇所にはっきり記されていますように、このイエス様を送ってくださったのは父なる神様です。神が私たちを愛してイエス様をくださったのです。怒りの対象を神は愛して、一人子の御子さえも与えてくださった。私たちはこの父なる神の驚くべき姿が見えるでしょうか。神の本当のお顔が見えるでしょうか。私たちはイエス様を信じるだけでなく、イエス様を通して、さらにこの方を遣わしてくださった驚くべき慈愛に満ちた神を知るところに本当の幸いといのちの喜びがあるのです。

それにしても神は一体何ということをお私たちのためにしてくださったことでしょうか。私たちは誰かが自分に対して行なった悪に怒りつつ、なおその人を愛することができるでしょうか。そのために自分の大切な一人子さえも与えるというようなことができるでしょうか。イエス様はなだめの働きをするために、ゲッセマネの園では汗を血のしずくのように滴り落としながら、祈りの格闘をされました。「父よ、どうかこの杯をわたしから取りのけてください。しかしわたしの願うようにはなく、あなたのみこころの通りにしてください。」と深く苦しめられました。そして十字架の上で叫ばれました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」 イエス様が私たちの救いのためにこのような大きな犠牲を払ってくださったことを私たちは心から感謝しますが、父なる神にとってこれはどういう出来事だったでしょう。永遠の昔からご自分のふところにおられるひとり子の御子が、このように苦しめられる姿を見ることは、父なる神にとってどれほどの犠牲であったかを一体誰が測り知ることができるでしょう。しかし何と聖書は、このことをしてくださったのは神だったと言うのです。神は私たちを愛して、このことをしてくださった。怒りの対象であった者たちを愛して、その者たちにいのちを得させるために、一人子の御子さえ差し出すことを惜しまなかった。何という神秘、何というミステリーでしょうか！永遠に賛美しても賛美しつくことなどできない愛です。ヨハネは「ここにこそ愛がある」と言っているのです。神の私たちにに対する愛はここにこそはっきり示されているのである、と。

私たちはこの本当のクリスマスプレゼントこそを、この時へりくだって感謝して受けたいと思います。あまりに恐れ多いプレゼント。なだめの供え物としての御子というプ

プレゼントです。これを受け取る時、その人に対する神の怒りはなだめられます。義の要求は満たされ、神の怒りはその人から取り去られます。そしてその人は神との交わりの中にある、永遠のいのちの祝福に生きる者とされるのです。ヨハネの福音書 17 章 3 節：
「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」 私たちのために尊いいのちまで投げだしてくださったキリストを知ること、さらにそのひとり子の御子を、私たちが愛して与えてくださった父なる神との交わりに生きること以上の幸いはありません。私たちはこの本当のクリスマスプレゼントを感謝して受け取り、神の怒りが取り去られ、聖なる神に受け入れられる幸いに、そしてこのようなどてつもない愛で愛してくださる神を知り、その愛の中で生かされ、育まれる永遠のいのちの幸いに歩みたいと思うのです。